

教主世尊の国を巡拝して

寺川俊昭

一月十八日、本当の駆足ではあったが、十七日間のインドでの仏蹟巡拝の旅の全てが終り、ボンベイのホテルでインド最後の夜を迎える夕、私は独りでこんな風に呟いていた。

「いよいよ明朝、私はこの国にサヨナラをいわなければならぬ。この大いなるインドに。」

英語のあまりできない私は、実はこんな感慨を英語で呟いてみていたのであるが、たまたま所用で部屋に來たボーイにこれといった時、彼は、*“this Great India”* という言葉に、全く同感であるといわんばかりの顔をして、にこっと笑ってうなづいていた。大いなるインド。これが二十日間の初めての訪問において、漸く私の内部に定着して來た実感であった。その実感は、僅かのネパールとタイでの滞在を通して、いよいよ動かし難いものとなつて行つた。あのインド社会の、眼を覆うばかりの貧しさ、大都市の殆んど無秩序にも似た混乱とも拘わら

ず。確かにネパールでも、殊にタイでも、町には日本製の商品が溢れ、日本製の自動車が多く走っていた。多くの人々の身なりは、インドの人々に較べれば遙かに小ざっぱりとしていた。だが私は何故かこの二つの国にはよく馴染めなかった。カトマンドゥからパトナへ帰り、あのそこはかとなく牛糞の匂いにする埃っぽい街頭へ入った時、正直に言って私は恰も故郷に帰つたような、一種の安らぎに似た感情さえ懷いた。バンコックの空港待合室の人混みの中で、一団のインドの紳士達が、彼等の年老いた父親と思われる老人の足許に身を屈して接足作礼し、合掌で別れの挨拶を繰り返すのを見た時、一種の畏敬に似た情念さえ、私は感じた。

カトマンドゥ郊外のスワヤンブナートにあるチベット僧院で垣間見たラマ教は、墮落し俗信の中に埋没した仏教という印象しか与えなかった。バンコックの壮麗な王宮建築と一つになっている仏教寺院は、そこに飾られた

多くの壁画や彫刻に一貫して、極めて原始的なイメージで荘厳されていた。そして訪問者の異国情緒と好奇心とを満たしてくれるだけの印象が、終始強かった。それに對してインドは、その現在の貧しさと混乱にも拘わらず、その伝承した文化の質の高さといおうか、何か精神的な敵しさとでもいうべきものを、通りすがりの旅行者にすぎない私の精神に、強く刻印せずにはおかないものを秘めていたのである。その点で私はインドに、大国という外はないものを感じるのである。

インドについての私の知識は、勿論極めて乏しい。仏教を中心とするインドの古典思想の理解を除けば、タゴールやネールの若干の著書、ガンジーについての紹介書及び『大唐西域記』だけである。殊に現代のインドについては、旅行案内と、岩波新書の極めて有益な二冊の本、堀田善衛氏の『インドで考えたこと』、石田保昭氏の『インドで暮らす』から得た知識だけである。そこに書かれたインド社会の特徴的ないくつかの事実は、慌しい旅行者に過ぎない私の見聞でも、十分にうなづけるものであったし、私の僅かの経験に、かなりの広さと確かさを与えてくれた。だが、駆足の旅行者に、そしてインドの知識層の人達と接する機会がなかった私達に、インド社会

の絶望的に困難な事情なぞ、どこまで本当に分かったといえるだろうか。ただ例えば痩せかけた赤ん坊を抱いたうす汚れた老婦人が「I am very hungry.」と、か細い声で嘔き続け、車にとりすがって施しを乞う姿に、あるいは又、ホテルの食卓で供せられるカスカスの不味いパンと、骨ばかりが目立つ瘦せたチキンの肉に、そして又都会の歩道の片隅で二三箇の石を積んで竈とし、家財といえは一二箇の鍋と数枚の食器とだけがその辺りに置かれていただけであり、夜ともなればその路上に、身に纏う布片を頭からかぶってごろ寝するらしい人々の姿に、我々は凄まじい貧しさの影をどう否定しようもなく感じることとはできた。その貧困の理由を尋ねていた私達には、二百数十年にわたってインドの富をただ収奪するだけで、代りに何物も与えなかったイギリスの苛酷な植民地支配に由来するといふ堀田氏の所論は、甚だ説得的であった。しかし植民地支配によって増幅されてはいても、恐らくそれ以外の、インド固有の幾つかの原因もあるに違いない。そういうことについては、機会を得て大いに勉強したい気持ちである。

それにも拘わらず、インド亜大陸の多くの事物は、私の魂を魅了するに十分であった。私が初めてインドの人

達と接したのは、カルカッタ郊外の日本山妙法寺を訪ねた時であったが、前夜カルカッタ空港に着いてホテルまでバスの車窓から見た光景に、いささか度胆を抜かれていた我々は、そこでインド人達が実は本当に穏かな、そして静かな人間であるらしいことを知って、大いに心安まるものがあったのであるが、その印象はボンベイを去るまで変えることはなかった。殊に農村の人達の純朴さはどうであろう。直ぐ物珍らしげに群り集まって来る子供達と、その愛くるしい瞳。写真を撮らせて欲しいと頼むと、姿勢を正してポーズをとる青年と、それをからかう友人達。家族の写真を撮ろうとすると、実に恥かしげに夫の陰に寄り添う貞淑そうな妻。クシナガラの積尊の御遺体を茶毘に付した所と伝えられるランバーラ・ストウパーにお参りした際、たまたま通りかかった中学生らしい少年に暫くものを尋ね、クシナガラ附近にある村が、アマルツダという名であることを知ったのであるが、お礼と記念にと私が持参したポール・ペンを彼に差し出した時、少年は一応辞退した後受け取って、自分のノートを取り出し、"You are very kind."と書いて如何にも恥ずかしそうに、私に見せてくれたのである。そんなふうにインドの農村の人達に接しながら、私は自分が子供

の頃育った戦前の日本の農村を想い起こし、思いがけず遠いインドでかつての日本の農村の雰囲気に遇う思いであった。あのホスピタリティーも、裸足で歩くのも、牛などの家畜と一緒に生活するのも、それらはまるで戦前の日本の農村と同じではないか。加えて我々が巡拝の思いで訪れた、仏蹟の多く存するパトナ、ヴァラナシを中心とするガンガー中流域一帯は、たとい現在仏教が全く消え去っているとしても、かつて仏陀が生まれ、仏陀の教えが仏弟子はじめ無数の人々によって生きた、まさにその地域である。夕闇が漸く迫る頃、気も遠くなるような大平原の畠の中の道を裸足の一人の男が頭からすっぽり布をかぶって、足速に遠くに見える村に急ぐ。そんな姿に、私はかつての遊行する比丘を思った。尼連禪河の河岸で草刈る村の婦人の姿に、二千五百年の昔、積尊に乳糜を捧げたというスジャータを偲んだりもした。涼しく美しい木蔭に立っては、樹下に冥想した比丘達の修道を思い、そして、コーサラの毘琉璃王に対して、「大王よ、親族の蔭は涼しい」とおっしゃった仏陀のお言葉が、如何にも実感深くうなづかれましたのである。

こういう事情のお蔭で、インドという全く異質の文化の中に身を置きながら、私は殆んど異和感も異質感も感

することはなかった。旅行中、如何にもインドに憑かれた男としかいいようのない、幾人かの日本人に出遇った。顔の色は陽にやけてややどす黒く、既に多少日本人離れがしているようであったが、今振り返って考えてみると、私にもインドに憑かれた男となる可能性が、どうも大分あるようである。インド社会の言語を絶する貧しさについては既に触れたが、しかし生活が貧困の中に投げ出されていることと、それを不幸だと感ずることは全く別箇の事柄である。私はインドの人達に、貧しさを不幸と感ずる態度よりもむしろ、貧しさに安住する態度を感じた。旅行者の無責任な観察であるが、無論豊かさの中にあってしかも貧しく、自分を幸福と考えることのできな現代日本人のひ弱な精神と比較して、一種の強靱な精神に敬意を表してである。インドにかなり長期間滞在し、鋭い観察眼と旺盛な探究心をもったある旅行者は、我々にこう語ってくれた。日本の農業技術指導についてであるが、どうも仲々定着しにくいようですと。成程、日本式農業によって収穫は確かに数倍に増えることは間違いない。それと共に、労働の方も以前の数倍の努力を強いられることも、間違いないのである。こうして数年間の努力の後、結局インドの人達の多くは日本式農業を棄て

て、元の原始的インド式農業に帰る。旧来の農法でも食ってゆけたのであるから、何倍かの収穫を得るために、あんな重労働をするのはかなわんという理由のもとに。こういう態度を怠惰と非難するのは、的を射ていないように思う。時間単位、それどころか現在では秒単位で仕事を追いつ、何も仕事をするのではない時間は何か為すべきことをしていないような後めたさと、耐え難さに苦しむ現代の日本人からすれば、それは怠惰であろう。しかしインドの到る所に見られる、大の男達が殆んど何もせず、ただボサーッと時を過しているあの光景。君達は一切何をしているのかと尋ねた日本人に、聞かれたインド人は質問の意味が解せなかったという。何かをするとは、齟齬と働くことだけであろうか。大自然の時間と一つになつて、いわば無限を生きながら、悠々と生死するあの無倦の精神。そういうことを感じながら、我々日本人の精勵さを、却って不健康なものと私はしきりに思っていたのである。

○

今回の旅行で巡拝した仏蹟は、順にいえばナーランダ、ブダガヤ、ラジギール、ルンビニー、クシナガラ、最後

にサルナートの六カ所であった。舎衛城の跡とサンチーへはお参りできなくて、残念であった。それに、仏教関係の遺蹟として、アジャンタ及びエローラの石窟寺院を加えなければならぬ。これらの仏蹟の中で、私が最も深い感慨を覚えたのは、ナーランダの僧院跡であった。

概して北インドの仏蹟は、古びた煉瓦造りの塔と僧房群とよりなるのであるが、ナーランダ到着が五時。沈み行く夕陽の中で我々は、上部が完全に破壊され、高さ約三十メートルの基底部だけが残っている大塔を仰ぎ、その上に登って広大な僧房群を俯瞰した。そして私は独りで、延々と続く僧房遺跡の中を徘徊した。迷路のように続く通路に面した僧房の列は、恰も煉瓦造りの独房のような観を呈しているのであるが、三疊、四疊半、六疊、八疊と、さまざまの大きさの僧房の中に、私は幾度となく入ってみた。壁には龕があり、恐らくかつてその部屋に生活した比丘達が、仏像を安置したか、書物を置いた所であろう。総じて私は仏蹟にお参りして、塔よりも僧房跡の方に、遙かに心引かれるものがあった。我々の先輩である比丘達が、まさにそこで生活した跡であるからであろう。そして方形に僧房が並んだ煉瓦疊の中庭に、一段高い壇がある施設も数多くあった。或いはこれは教室

跡で、あの壇こそ長老比丘が比丘大衆に講義した講壇であるに違いない。そんなことを空想しながら私は、かつて読んだ『大唐西域記』の記録を、くつきりと想起していたのである。ここに前嶋信次氏の『玄奘三蔵』（岩波新書）の文章を引いてみよう。

「多くの伽藍をこめてひと連がりの煉瓦塀が囲み、きらびやかな殿堂の間を緑水がゆるやかに流れ、蓮花の咲きみだれる池のほとりには羯尼華樹が繁り、そして外にはアームラの樹林が涼しい木蔭を作っていた。

諸院僧房は四階建てで彩色され、到る処に巧みな彫刻が施してあった。五インドのうち、規模の大きさ、建築の美しさで、このナーランダ寺に及ぶ寺院はなかった。（中略）

ナーランダ寺は、当時のインドで他に比肩するもののない権威のある大学であった。大乘仏教が研究の中心であったが、他の諸派の仏教教義も研究され、古典ヴェーダから初めて、因明、声明、医、数等の諸学に至るまでの権威者が集っていた。数千の学徒のうち、経論二十部に通じたもの一千余人、三十部に通じたもの五百余人、五十部を修めたものは十人で、玄奘はその最後のものの一人であった。そして、この多数の学

僧中、学問においても、人格に於いても断然他を抜き一山の宗匠と仰がれていたのが、正法藏戒賢法師であった。

この寺では、毎日百余カ所に講座が開かれていたから、寸陰も無駄にせず研究に没頭することが出来た。

創建以来、玄奘が滞在したときまで既に七百余年を経ていたが、諸国の秀才のここに学ぶものは依然多かった。一度境内に入ったら、仏典の深い意味を論ずるの
でなければ誰も相手にしないと云うほどに好学の氣風がみなぎった、眞の学問の府であつた。」(八八―八九頁)
玄奘が訪れ、滞在し、学んだ頃の盛観は勿論今はない。イスラム教徒によって破壊された一種の廢墟として、あのナランダ大学は白日のもとに横たわる。インド平原の薄明の中を、あの一種の香りをふくんだ空気を吸いながら、私はここで学んだ多くの論師達、護法を、戒賢を、玄奘を、しきりに偲んだのである。

遺跡から少し離れたところに、現在の新しい仏教研究所 Navanalanda Mahavihar Institute がある。学生数百数十人、teaching staff 十数人の規模である。ここはかつて本学の桜部・長崎両先生が、留学し学ばれた研究所である。我々は残念ながら、ここを訪れる時間がな

つたが、たまたま数日前、ここに宿泊した前記旅行者の談によると、桜部、長崎両先生のお名前はよく記憶されており、両先生から大きな恩恵を受けたことを感謝していたそうである。本学のチベット大藏経が寄贈されている由であるが、ある teaching staff の談話として、何故大谷大学は、両先生のような真面目な学識ある若い学徒を、引続き派遣してくれないのかと、両先生の後継者を切望していたという。ここに学ぶインド及び主として南方仏教国の学徒は、日本仏教の高い研究水準に対して、非常に深い、むしろ切実な関心をもっているのだけれども、現状は残念ながら研究書を揃えることも、またその日本の研究書の内容を、ここに学ぶ人達に紹介し伝達する学徒もいない……。こういう話を聞きながら、遠いインドでわが大谷大学の名を聞き、両先生のお名前が尊敬と共に語られるのを聞くことは、やはり一つの感動であつた。と共に、眞宗の学徒としての責任ということをも、改めて強く感じたのであつた。

一体、今度の旅行で私が最も大きな感動を受けたのは、カルカッタの妙法寺と、ブダガヤの大塔と、ガンディーを火葬に付したラージガートに参詣した時であつた。妙法寺で目撃したのは、三々五々この寺にお参りし、仏陀像

の前に礼拝するインドの市民にまじって、如何にもみすぼらしい身なりをした母子が、——寺の人の話を聞けばそれは *untouchable* であるが——何の差別もなく同じ様に仏陀の前に礼拝する姿であった。その瞬間、私は仏陀のあの四姓平等の教説を想い起こした。音に聞くインドのカースト制の中にあつては、四姓平等の教説こそは極めてラジカルな主張であり、だからこそ仏陀の慈悲の明確な表現であつたに違いない。そしてこの教説によつて仏教は世界宗教たり得たと共に、この思想によつて仏教はインド社会から閉め出されたのである。私は前日バスの車窓から見た、マイダン公園の道路の一方には富豪の美しい別邸が並ぶその反対側に、文字通り泥と錆トタンで作られた泥小屋に住む *untouchable* 住居区との余りにも厳しい対照と、今目前にする貧しい母子の礼拝の姿とをダブらせながら、何か大きな感動を覚えつつ、四姓平等に表われた人間解放の香り高い、仏教の原始の生命を思わずにはおれなかつたのである。

ニューデリーのラージガートは、緑の芝生に覆われた美しい公園である。ガンジー火葬の跡には黒い石造りの記念碑が置かれ、その正面に「ヘイ・ラーム」(おお神よ)との、ガンジー最後の言葉が浮き彫りにされていた。イ

ンド独立と解放のために戦い抜き、大衆から *Matama* と尊敬せられたこの人の茶毘所に『嘆仏偈』をあげながら、私は何かこみ上げるような感動の中で、全く形を変えた仏陀の慈悲の心が、いやむしろ菩薩の強靱な精神が彼を生かしていたことを、改めて強く強く感じたのである。

一月七日夜十時、照明はされていたが夜の闇の中で、我々はブダガヤの大塔に参拝した。あの菩提樹の下での金剛宝座に額づき、まさしくここ、この地点で、われらのために仏陀となり給うた方を思うて、私は全身が感動するのを覚えた。大塔に五体投地し、右繞し、あるいは傍の樹下で瞑想し、灯を献じ香をたく異国の仏教徒の中に伍して礼拝しながら、キリスト教においてもイスラム教においても、聖地の巡礼が何故にあれだけ熱心に行われるかを、初めて合点した思ひであった。

総じて仏蹟の巡拝によつて、私は改めて教主釈尊の恩徳ということを、今更のように身に感じ、又教主の意義を問い返さずにはおられなかつた。極めて通俗的に理解されているように、真宗においては阿弥陀仏への純潔な帰依を説く。そのことを強調するの余り、しかしながら過去の真宗は釈尊を軽んずる誤りを犯さなかつたと、いい切れるであろうか。果して真宗寺院には、釈尊像はど

こにも安置されていない。けれども善導師の教えによれば、浄土真宗は二尊教である。宗祖の『教行信証』は、群萌の一乗として如来の本願を説く『大無量寿経』を真実教と宣言する文から、書き始められている。この『大無量寿経』に釈迦仏出世の本懐をかけた真実教を聞くことに立って、浄土真宗の教行信証は開頭せられているのであり、そこに宗祖の健康さがある。いずれにしても決して忘れてはならないことは、浄土真宗はまさしく仏教であり、阿弥陀如来に帰依することは、釈尊の深い教恩によるということである。その教主世尊の恩徳を現身に感ずるためにも、真宗を学ぶ学徒は是非とも仏蹟の巡拝をすべきであると思った。あのピンピサーラの道を汗しながら登り、霊鷲山の頂の世尊説法の跡を拝することによって、『大無量寿経』、『観無量寿経』の教説が、どれだけ身近に生き生きと感ぜられることであろうか。

これに加えて、我々にとっては異国である仏教の母国に身を置くことによって、初めて気のついたことがある。それは真宗は日本の仏教である、という事実である。成程、三国七祖の伝統という。しかし親鸞聖人の浄土真宗は、日本で展開した仏教であり、殊に宗学は封建社会であると共に、それ以上にむしろ、鎖国社会で形成された

仏教学である。その点において、学の精緻さにおいては、わす、一たび国際的な思考の場に持ち出した時には、宗学は狭さという限定を免れぬのであって、今の真宗学に要求されるものは、ある意味でのまさにその国際的視野において、浄土真宗の真实性を顕揚するという課題ではなからうか。仏教の精髓を開頭した宗祖の浄土真宗の真理性を、狭い限定の枠の中だけで伝承することに安住してはならないという要請である。インドで接した二三のヨーロッパ人は、鈴木大拙先生のお仕事によって、かなりよく禅の仏教については知っていた。しかし本願の仏教、真実の仏教については、何一つ知らなかった。それに対応して、かつて南条先生を生んだ我々の真宗教団は、この方面では現在殆んど何一つしていない。余りにも無関心であり過ぎて、留学生を組織的に派遣することさえ行っていない。そういう真宗の現状を反省して、広い国際的即ち人類的視野のもとで、浄土真宗の荷うべき課題を直接肌感ずるためにも、私は若い真宗学徒の方が進んで自ら仏蹟を巡拝されることを、心からお願いしたいのである。仏教が滅び去った仏教の母国インドに、我々日本人の仏教徒は何を以て応えるべきか。真宗教徒の責任の重さをつくづくと思わざるを得ないのである。